

第 24 回黒川利雄がん研究基金の研究助成金贈呈式に出席しました。 (2013/6/11)

場所：仙台KKRホテル

1958年に設立された宮城県対がん協会の初代会長である黒川利雄先生は、全国に先駆けて胃がんの集団検診を開始したことから、宮城県はがん集団検診発祥の地として知られています。「黒川利雄がん研究基金」は故黒川利雄先生の遺志を受け、がん予防及び早期発見に関する技術の開発等に係わる研究助成を行うことを目的に創設されました。今回、災害産婦人科学分野の研究の一つである「ストレスホルモンと子宮内膜癌」に対し、平成25年度（第24回）「黒川利雄がん研究基金」研究助成金が三木康宏（災害産婦人科学分野）に贈呈されました。贈呈式が6月11日に行われ、会長の久道茂先生より4名の研究者一人ひとりに研究助成証書と助成金の贈呈が行われました。式典の開始に先立って、久道先生をはじめ、運営委員会の先生方との歓談の時間を設けていただきました。久道先生より災害研究と本研究主題との関連についてご質問を頂き、災害産婦人科学分野として取り組んでいる「災害研究における基礎医学研究」について紹介しました。以下にその内容を記します。

被災した後、早期のストレスだけではなく、さらに数年間にわたって心理的ストレスが生活や健康に様々な側面で影響をおよぼすことが明らかにされています。ストレスに際し、多種のストレスホルモンが分泌されます。ストレスホルモンであるコルチゾールは組織内で合成酵素と代謝酵素によって量的調節を受けていると考えられます。我々のこれまでの研究では、子宮内膜がんではこの合成・代謝のバランスが破綻していることを明らかにしてきました。現在、さらにストレスホルモンの細胞レベルでの影響についての検討を計画しています。ストレスホルモンとがん化のメカニズムは未だ不明な点が多く、このメカニズムを明らかにしていくことががん発生の予防につながるのではと考えています。

渋谷大助先生（宮城県対がん協会がん検診センター所長）から各研究者の紹介が行われた際に、災害研究における当分野の取り組みについて言及頂き、贈呈式に参加された対がん協会の理事の先生方ならびに来賓の方々に広く当分野の研究を知って頂く機会となりました。今後、ストレスの婦人科疾患に関する基礎研究を進めるとともに、被災地での婦人科疾患の発生状況の把握が重要であると考えています。



左図：会長の久道茂先生から研究助成証書と助成金が贈呈されました。

右図：黒川先生が座右の銘としていた「山上に山あり山また山」を刻んだ石版が贈られました。